

境界性人格障害の心理的理解と支援についての質的研究 —作家 太宰治を事例とした解釈学的現象学の立場から—

Qualitative Research on the Psychological Understanding of and Support
for Borderline Personality Disorder
—A Case Study of Osamu Dazai,
from the Standpoint of Interpretive Phenomenology—

田 中 誉 樹
TANAKA Motoki

I 目的と意義

本研究の目的は、境界性人格障害Borderline Personality Disorder（以下、BPD）を「病むということ」が、当事者本人によって、どのように経験され、どのような固有の意味を持つ事態であるかを明らかにすることである。したがって、ここで問題となるのは、BPDの精神病理や人格の心理的・力動的構造についての、「自然科学的・実証主義的」な解明ではない。

自然科学的諸研究の意義は大きいですが、これらの研究の視点には、心理療法という営みの本質にかかわる、重要な事象が二つ欠けている。それは、一つにはBPD患者自身が、自分のBPDの心理的状态をどのように意識し、経験しているかということである。二つには、BPDを「病む」ということが、BPD患者の人生の文脈の中で、どのような意味を持っているかということである。心理療法家は、知識と経験と訓練によって、「心理学的＝客観的」な見方をできるようになる。しかし、この「心理学的＝客観的」見方は、心理学の諸理論から、意識によって構成された見方であることを忘れてはならない。このような見方は、心理臨床家によって、「当たり前の前提」として無反省的に用いられることによって、フッサールのいう「自然的態度」の性質を帯びるようになるのである。次に、本研究は、BPDの病理の普遍的本質や哲学的・神学的真理を見出そうとしている訳でもない。患者個人の「生の在り方＝実存」は、形而上学的な観念へと還元されることもできない。本研究の目的はあくまで、ある一人の患者の生Lifeの中で、BPDという病がどのような個人的意味を持つ事態であるかを明らかにすることである。

II 方法

1. 方法の概要

本研究では解釈学的現象学的分析（Interpretive Phenomenological Analysis、以下、IPA）による「一事例のテキスト分析」を行った。事例としては、作家の太宰治を取り上げた。太宰

治は、今日の精神科医によってBPDであると考えられており、筆者自身も、その生活史や行動の特徴から同様のアセスメントが可能であると考えている。手続きとしては、太宰の病像と人間像を把握できるような文献資料を可能な限り収集した。ただし今回の研究では、BPD的な側面が顕著に表れている昭和10年～11年頃の太宰に関する資料を用いている。特に、この時期に太宰自身によって書かれた書簡は、できる限り収集した。他には太宰を直接知る人達の回想録、太宰の主治医が太宰の死後に公表したカルテ、実証的な研究に基づいた学術書、事典、年鑑などを補助資料として使用した。IPAによる分析は、時候の挨拶等の事務的なものを除外した太宰の書簡と「綴り書き」33通を対象に行った。作品については、自伝的な内容のものであっても、事実を意図的に変えていたり、創作された内容が混在していたりしていることが多いため、対象とはしなかった。

2. 手続き

分析の手順は、以下の通りである。

①太宰の誕生から昭和11年までの生活史を、家族や友人、仕事上の関係者など、太宰を直接知る人達の回想録、太宰の主治医が太宰の死後に公表したカルテ、実証的な研究に基づいた学術書、事典、年鑑などを補助資料として作成した。そして、それと照合しながら、基本テキスト（手紙・葉書）を理論的先入見なしに何度も精読した。その際、現象学的分析の原則に基づいて、精神病理学や臨床心理学的な理論による判断を可能な限り「判断保留」(エポケー)した。

②テキストを、生活史の内容に照らし合わせながら繰り返し（延50回程度通読）精読した。頻出する単語や表現、太宰独得の言い回しなどの「言葉」を抽出、コード化した。この作業は、現象学的な無前提性を確保できるように、意味のある「言葉」を研究者が意図的に「探す」のではなく、精読する過程で研究者によって「気づかれた」(意識に現前してきた)「言葉」をコード化するように心がけて行われた。また、解釈学の方法にしたがって、一度、コード化された「言葉」であっても、生活史を含めた全体の文脈に照らして、テキストを再読する過程で、不要または不適当であると判断されたものは除外した。

③「②」でコード化されたものを、その意味内容ごとにカテゴリーとして分類し、カテゴリーごとのサブテキストを作成した。

④生活史・手紙の背景を考慮しながら、各カテゴリーごとのサブテキストを1人称記述（読み手に対する語りかけ）へと書き換えた。このようにすることの意味は、研究者が、テキストの内容を、生き生きと体験できるような形式へと還元することを意味する。基本テキストも一人称記述の書簡と葉書であるが、同じ一人称でもサブテキストの一人称記述とカテゴリーごとに分類したテキストの一人称記述とは、内容的に異なる性質を持っている。前者は、現象学的手続きを経っていない、生のテキストであり、そこに書かれているのは、もとの手紙の一人称記述である。後者は、上述の①～③の手順でコード化され、太宰の実存様態を明らかにするうえで、意味があると思われる言葉や文を、その意味毎にカテゴライズして意味毎に再記述されたサブテキストとしての一人称記述である。本研究において重要なのは、テキストを客観的に

理解することではなく、テキストを通して語られている患者（ここでは太宰治）の独自でユニークな実存様態と、「生きた仕方であう」¹（渡辺,1975）ことである。そのようなときにのみ、研究者は語り手の真意すなわち、この語り手が語ろうとしている固有の「意味」を把握することができる。そのために、意味ごとにカテゴライズされた内容からテキスト再構成する際にも、1人称による語りかけの形式で記述することが必要となるのである。

⑤「④」より太宰にとっての「病む」ことの意味を総合的に記述した。現象学的判断保留（エポケー）を基本的な態度として心がけた。

⑥「⑤」の記述を、更に実存的な意味が明らかになるようなテキストとして記述した。

Ⅲ BPD概念の変遷および太宰のBPD的特徴

太宰のIPAによる分析を行う前に、BPDの概念と太宰に見られるBPDの症状について概説しておきたい。IPAによる分析と従来の精神医学や心理学による分析の違いを分かりやすく提示するためにも、この作業は必要である。

1. BPDの概念変遷

BPD概念の変遷については、筆者も別のところで概説しており²、他にもより詳細にまとめられた先行研究が多くみられるので、ここでは、拙著より要点だけを簡潔に記述する。BPDが問題となり始めたのは20世紀初頭からである。通常心理療法による治療が一見可能に見えながら、ある程度それが進んでくると、精神病的な混乱状態を呈し、治療困難となる患者が多く見出されて来たのである。当初、境界例概念は、神経症と統合失調症との境界状態を指していた。しかし研究が進むにつれて、それだけでは説明のつかない症例も報告されるようになり、やがてカーンバーグKernberg,Oによる、「境界性人格構造Borderline Personality Organization（以下、BPO）」（カーンバーグ、1983）という概念が現れ、人格構造上の一疾患単位として考えられるようになった。また、マスターソンMastersonは、「愛情撤去型対象関係部分単位WORU」と「愛情供給型対象関係部分単位RORU」という二つの対象関係単位への分裂をBPDの特徴であると主張した（マスターソン、1972）。

2. 太宰におけるBPDの特徴BPO

ひとくちに、BPDといっても、すべての特徴をすべての患者が同じように、同じ度合いで持っているという訳では無い。なかには、ある患者には見られても、他の患者には見られない人格構造もある。ここでは、BPDの基本的な特徴で、太宰治にもその傾向が強く見られるも

1 現象学者の渡部二郎は、哲学の歴史的研究について言及した際、歴史すなわち過去が、生き生きとした形で蘇ってくるのは、歴史家が「所与の事実と生きた仕方であう」ときに限られると述べている。

2 拙著『人間学的境界例論』かもがわ出版、2006

のを概観していく。米倉は、太宰が分離個体化期に、すぐに実母から引き離され、「母親代理者」によって養育されたことによって、生母からの愛情を拒否されたと感じ、「見捨てられ不安」を体験し、同時に自分を見捨てた母親に対する怒りや憎悪、復讐心を強く抱くようになったと分析している。自我心理学や対象関係論では、分離個体化段階へのリビドーの固着は、BPDの原因となりうると考えられている（マスタートソン 1981）。米倉は、太宰が共産党の非合法活動に関わった事、芸妓との結婚、その他、自殺未遂や心中事件、薬物依存などの行為を、彼のBPD心性の表れと解釈し、そのような形で母親や兄を苦しめることによって「復讐」をしていたのだと分析している。また、何人もの女性に対するいい加減で無責任な態度も、原始的な母親像（all bad mother）に対する憎悪と復讐に根ざした態度であったと解釈している。さらに、太宰には、女性に対する依存傾向があったとも指摘している（米倉、1982）。特に、上述のように、乳幼児期に実母から十分な母性的庇護を受けられず、その後の代理的母親（乳母、叔母きえ、奉公人タケ）とも、少年期に離別しなければならなかったことで、太宰の内的な母性体験が不安定でまともに欠けたものとなっていた可能性は大きい。このことは二番目の妻である津島美知子が、後年、越野タケから聞かされた「（太宰は）甘やかせば、きりのない愛情飢餓症」であったという言葉からも推測できる（津島、2008）。また、『太宰治事典』（東郷編 1995）の「性/女性」の項には、太宰が作品の中で描く女性像の中に、「母性的な女性像の系譜」とでもいいうるものが見られ、母なるものへの憧憬を読み取ることができると記述されている。

このように太宰には、女性に対する強い依存傾向があり、依存的愛着と憎悪と言う分裂 splittingした態度が見られることが指摘されている。筆者が、太宰の書簡分析を行った際にも、その内容にBPD的な傾向を示す箇所が見られた。特に、借金を哀願する内容の手紙、芥川賞受賞を哀願する手紙は、「拒絶されたら死にます」といった、「自殺の仄めかしによる脅し」「自殺を示唆して周囲を操作しようとする傾向」が見られ、これなどもBPD患者にはよく見られる特徴である。アルコールと薬物への依存が相当重症であったことは、書簡からも十分に読み取れる。これもBPD患者の特徴の一つである。生活史的に見ても、米倉や町沢が指摘している通り（米倉、1982、町沢、1990）、度重なる自殺企図やアルコールおよび薬物への依存、異性関係の放埒さといった、BPDの診断上、重要な特徴が太宰の生活面、行動面には顕著に見られる。

IV IPAによる書簡分析

1. 上記手順の①②

以下にⅡ－2、「手続き」で示した手順に従って行ったIPAによる書簡分析の結果を記載する。しかし、その前に、生後から昭和11年までの太宰の生活史の概略を記載しておきたい。生活史もまた、個人の理解のために必要なテキストであり、それは、信頼のおける情報源からの情報によって構成されたものでなければならない（引用・参考文献欄参照）。

太宰治（本名津島修治）は、明治42年、青森県北津軽郡金木村に、津島家の六男として誕生した。実家は、新興地主として財をなし、金貸業も営んでいた。父親は、政治家であった。東北地方では、三男より下の男子のことを「オズカス（オジカス＝余計者）」と呼び、このことが太宰の自己像の形成に影響を与えていると考える研究者もいる（相馬、1968）。父親は厳格で、あまり子どもたちと接することがなく、家には不在のことが多かった。太宰の母親であるタネは病弱で母乳の出が悪かったため、太宰は産まれてすぐ乳母によって養育された。その後、タネは、父親について東京に住むようになった。乳母も、太宰が三歳の時に結婚のため津島家を去っている（高山2004、山内2012）。乳母が去った後、太宰の養育に当たったのは、叔母きえと奉公人の越野タケであった。叔母きえは、太宰を我が子と同じように可愛がり、寝かしつけもしていた（市川2001）。太宰は、叔母の「出ない乳」をくわえつつ、叔母が語ってくれる昔話をじっと聴いていたという（『全集 12』、1957）。太宰は、『思い出』の中で、「叔母の乳房の夢」を書いている。タケは、太宰に「本を読むこと」を教えた。本を与え、就学年齢前から、太宰を小学校に連れて行ったりした。タケは、結婚のため、太宰が8歳の時に津島家を去った。叔母も、同じころ津島家を出たそのため太宰は非常に悲しかったという（山内、2012）。

小中学校時代は、活発でよく遊び、クラスの人気者であった。大正12年、15歳（青森中学在学）の時に、父親が肺癌のため死去（山内、2012）。長兄が家長となる。昭和2年、18歳（弘前高等学校在学）の時、憧れていた芥川龍之介が自殺し、強い衝撃を受ける。その後、学業に身が入らなくなり、義太夫、花柳界、江戸文学などに凝るようになる。太宰が芥川に憧れた理由は、芥川の文体や才能、名声等に対する一文学青年としての羨望もあったと思われるが、他に重要な要因として、相馬は、芥川と太宰の生い立ちに共通する点が多いことを指摘している（相馬 1995）。特に実母が芥川の生後9か月で発狂し、実母の愛情を十分に受けることなく育ったこと、伯母によって養育され、伯母への愛着が強かったこと、実父や養父との関係が悪かったことなど、太宰は、自分と似たような生い立ちを持つ芥川に共感的な心情を持っていたのではないかと考えられる。昭和4～5年歳時、期末試に対する不安からカルモチンを服用して自殺を図るが、本当に自殺するつもりがあったかどうかについては、疑問視されている（長篠 1969）。21歳の時に東京帝大仏文科入学。かねてから尊敬していた井伏鱒二と会い、以後、師事する。この頃、共産党活動に関係していた。青森時代に知り合った芸妓、小山初代と駆け落ち同然の形で結婚する。津島家は、結婚を認める代わりに、太宰を分家除籍にした。そのことが、太宰に与えた精神的動揺は大きく、カフェで女給をしていた田辺あつみと親密になり、鎌倉の小動崎にてカルモチンを服用して心中を図る。その結果、あつみは死亡したが、太宰は救助された（猪瀬2007）。初代は、この事件を知って太宰との結婚を躊躇するが、家族の後押しもあり結婚した。昭和6～9年、実家からの圧力で非法法運動離脱。昭和10年、帝大留年確定し、このことに怒った長兄は、学費の援助を打ち切る。太宰は、新聞社の入社試験を受けるが落第。

同年3月、鎌倉で縊死を企てるも失敗する。狂言であったという説もある（猪瀬 2007）。4月に、盲腸炎に腹膜炎を併発し入院してから、鎮痛剤パビナールへの依存が始まる。「道化の華」、「逆行」発表。第一回芥川賞候補に、この二作品が上がるが落選。選考委員であった川端康成と、選考経過の是非について応酬。この頃、佐藤春夫と知り合い、以後、師事する。9月、東京帝大除籍される（授業料未納）。昭和11年に入ると、パビナール依存が進行し済生会芝病院に入院するも、一か月足らずで治療半ばのまま退院。6月に『晩年』刊行、7月に「虚構の春」発表と、創作は続け、群馬県湯河原温泉にて療養し、パビナール依存からの回復を図るなどしていたが、第三回芥川賞落選を逃し、強い衝撃を受ける。この時も、佐藤春夫が「虚構の春」を好意的に評したのを、芥川賞受賞の内諾と取り違えていた太宰は佐藤を非難する手紙を書く。10月、「パビナール依存が著しく進行したため、妻、初代と井伏鱒二らの計らいで東京武蔵野病院に入院。一か月後にパビナール依存から回復。退院する。昭和10年3月、鎌倉山中で首をつって自殺を企てたとの説もあるが、事実であったかどうかは、立証されていない。しかし、小館善四郎氏は、太宰が縊死を企てたと言われている日の前日、太宰に誘われて歌舞伎座や浅草などで遊んだが、タクシーの中で、ひものようなものを、わざと見えるように懷から出し入れしていたと述べている³。

以下に、上述のようなプロセスを経て行ったIPAによる太宰の書簡分析の結果を以下に示した。ただし、紙数の都合で、33通の書簡とその分析過程すべてを記載することはできないため、ここでは、文脈上必要最低限のものだけを提示した。番号は、33通の書簡分析の過程で付けた番号である。ここには、1、5、9、11、18、22、23、24、の8通を提示した。上記のIPAの分析手順の通り、精読のうえ、コーディングを行っている。

1. 綴方 大正12年2月4日（15歳）

①僕は母から生れ落ちると直ぐ乳母につけられたのだそうだと。②けれども僕はをしいかな其の乳母を物心地がついてからは一度も見た時もないし便りもない。③物心地^{ママ}ついてからといふものは叔母にかかつたものだ。叔母はよく夏の夜など蚊帳の中で添い寝しながら昔話を知らせたものだ。僕はおとなしく④叔母の出ない乳首をくはいながら聞いて居た…中略……中略…⑧たけに『本』を教わり、うれしくてたまらないから⑨叔母様に読んで見せると必ず昔話一つ知らせて呉れる⑩母様の前で読んでも何もくれない。⑪一番怖いものは父様であつた。⑫…中略…今でも叔母様やたけの事を思ふと恋しくてならない。

5. 山岸外史宛 昭和10年8月7日 船橋より

②おれはしかし、病人ではない。絶対に狂つてゐない。…中略…③三服のスイミン薬と三本の注射でふらふらだ。④昨夜一睡もせず。

3 ETV特集「太宰治 死を人質にして生きた男」での小館氏本人の証言による。

9. 山岸外史宛葉書 昭和10年11月13日船橋より

①「神聖なる病氣」と題し みどり児の
ひいひい泣くや冷月と
我みどり児は、捨て子なるべし。

11. 佐藤春夫宛 昭和11年2月5日千葉県船橋町一九二八より

一言のいつはりもすこしの誇張も申しあげません。
 物質の苦しみが かさなり ①死ぬことばかりを考へて居ります。
 ②佐藤さん一人がたのみでございます。私は、恩を知って居ります。
 私は、すぐれたる作品を書きました。③これから、もっともっと、すぐれたる小説を書くことができます。私は、もう十年くらゐ、生きてゐたくてなりません。私は、よい人間です。しつかりして居りますが、④今まで運がわるくて、(死への欲求)死ぬ一步手前まで来てしまひました。⑤芥川賞をもらへば、私は人の情に泣くでせう。
 ⑧みもよもなくふるへながらお祈り申して居ります。
 ⑨家のない雀

18. 淀野隆三宛 昭和11年4月17日 船橋より

①死にたい、死にたい心を叱り叱り、一日一日を生きております。唐突で、冷汗したたる思い出ございますが、二十円、今月中にお貸してくだされまし。…中略…②信じてください。拒絶しないでください。一日はやければ、はやいほど、助かります。心からお願い申します。…中略…

22. 佐藤春夫宛 昭和11年6月20日船橋より

①私はこの五六日死なうと思つておりました。
 狂言の神の、稿料として、②三十圓 貸興おねがひ申します…中略…日々 明るければ何の 自殺ぞや 注射ぞや赤いガラスの風鈴ひとつにさえ 生きている喜び を感じます、④肉親の愛情しらぬ児なのです、⑤(拙作「思ひ出」その意味からでもご一読 お願いひ申します) …

23. 鱒崎潤 昭和11年6月28日 船橋より

③貴兄に五十圓断られたら、私、死にます。それより他ないのです。…

24. 川端康成宛 昭和11年6月29日 船橋より

①(芥川賞を)何卒 私に与へて下さい 一点の駆け引きございませぬ。…中略…困難の一年で ございました。④死なずに生きとほして来たことだけでも ほめて下さい…中略…よろめいて居ります。⑤私に 希望を与へて下さい。

2. 上記手順の③④

精読され、テキストの中からコーディングされた、「全体の文脈に照らして意味のある言葉」を、その意味内容によってカテゴライズしたところ、以下のような八つのカテゴリーに分類できた（カテゴリーは八つであるが、コードは、紙面の都合上、省略しているものもある）。太字になっているのは、二つ以上のカテゴリーにまたがった意味を含んでいると判断された言葉である。本稿では、この重複部分についての詳細な分析記述は割愛するが、このようにして太字にして見渡すことで、一つの言葉に複数の意味がこめられている可能性があることを確認できた。尚、このカテゴリー化に対しても、研究者の恣意的な分類であり、客観的な基準の設定がなされていないのではないか、という批判が出るであろう。しかし、現象学的な一事例研究において重要なのは、まず研究者（筆者）が可能な限り、自分の持っている先入観や知識（臨床心理学的な理論も含む）にとらわれた「自然的態度」から自由になり、研究者が恣意的に意図をもって対象に意識を向けるのではなく、対象の方から意識に「現前」Präsentationしてくる内容を記述していくということである。そのためには、テキストを何度も通して精読することが必要である。それもただ何度も読むのではなく、テキストを患者（ここでは太宰）の生活史と照合しながら、一度、現前してきた言葉や文章も、全体の文脈の中で再吟味し、意味のある言葉や事象だけを精選していくということである。

1、5、9、11、18、22、23、24、

カテゴリー1：母性体験（1-①～⑩、9-①、22-④）
カテゴリー2：病気の経験（3-②～④、5-②～④、9-①他）
カテゴリー3：死（死への憧憬と処世術としての死）（11-①③④、18-①、21-④、22-①②、24-④⑦、23-③）
カテゴリー4：愛情希求（1-⑫、3-①、5-①、11-②⑤⑥⑦⑧⑨、22-④、30-①、9-①）
カテゴリー5：書くこと、語ること（1-③④⑧⑨⑩、11-③、21-⑥）
カテゴリー6：芥川賞への渴望（11-①⑨、21-④⑤⑥、24-②～⑦）
カテゴリー7：対人関係（1-⑪、5-①、11-②⑤⑥⑦⑨、30-①②）
カテゴリー8：自己憐憫（11-③④⑧⑨、21-③④⑥、24-⑦、30-②）

これら1～8のカテゴリーそれぞれについて、生活史や他のカテゴリーとの関連を考慮しながら、一人称記述からなるテキストへと変換しているが、そのすべてを記載することは、紙数の関係で難しいため、例としてカテゴリー3、5、6の一人称テキストのみをあげておく。

カテゴリー3：死（死への憧憬と処世術としての死）

死ぬことばかり考えている。いつも運が悪くて、死ぬ一歩手前まで来てしまう。死にたい死にたいと思う心を自分で叱りつけながら何とか生きている。こんな気持ちは家人には

見せられず、つとめて華やかに振る舞っている。こんな私を助けてほしい。死なずに済むように助けてほしい。お金があれば、薬があれば、死なずに済む。切羽詰まっているのだ。今まで生きてきただけでもほめてほしい。

カテゴリー5：書くこと、語ること

私は、生まれてすぐ母親から離された。ひいひい泣いている捨て子の嬰兒、家のない雀のように心細いのだ。叔母の乳の出ない乳首をくわえながら、昔話を「もらった」。物心ついてからは、タケが「本」をくれた。本を読めると、叔母は「昔話」を一つくれた。実母は何もくれなかった。私には、「昔話」をもらい、「本」を読んであげることは、大事なことだ。だから、病気でも、毎日、一枚ずつは書いている。

カテゴリー6：芥川賞への渴望

死ぬことばかりを考へて居ります。佐藤さん一人がたのみです。芥川賞、もらえなければ死ぬしかありません。芥川賞をもらえば、私は人の情に泣くでしょう。あなたの情におすがりするしかないのです。私を助けてください。私をきははひで下さい。みもよなくふるへながらお祈り申して居ります。芥川候補みんな、活躍しているのに、私、一人のけ者です。なぜか、見当もつきません。不安です。誰彼の区別なく恨めしく思ひます。私に希望と名誉をおくれ。

このように、一人称のテキストに変換する理由は、記述された内容が、研究者の意志に現前してきた時の言葉として記述すること、すなわち、研究者に対して語りかけられた言葉として、研究者（自然的態度をエポケーしていることが前提）が自らの感性をも分析過程に参入させ、太宰が書いている言葉の意味を深く吟味することが可能となるからである。

3. 上記手順⑤⑥

次にすべてのカテゴリーの内容及び、生活史を網羅した「実存的な意味からの一人称テキスト」を作成した。以下にそれを示す。尚、以下のテキストにも、紙数の関係から、記載できなかった書簡やカテゴリーの内容も含まれている。

一番、欲しいのはポーズではなく、愛情だ。私は叔母の乳の出ない乳首をくわえながら、母乳の代わりに昔話を「もらった」のだ。私にとって「昔話」は母乳（母性愛）と等価なのだ。物心ついてからは、タケが「本」をくれた。本を読めると、叔母からは昔話（母性愛）をもらうことができた。私には、「昔話」をもらい、「本」を読んであげることは、愛情を交換することと同じなのだ。なのに実母は、私が本を読んでも何もくれなかった。書いても何もくれなかった。むしろ勘当された。実母に対して感じるのは侘しきさだけだ。父

は恐ろしいだけだ。私にとって「芥川賞」は、最高の「お乳＝昔話一つ」だ。憧れの芥川龍之介の名前がついた賞だ。この賞をもらうことは、私の「書くこと」の意味と価値が認められたということであり、叔母が、「昔話一つ」くれたのと同じだけの値打ちがあるのだ。すなわち、私が生きるための母乳、私が生きる根拠を与えてくれるのだ。私は、社会的には所詮、オズカスだ。「本」を上手に読んで聞かさなければ、生きている価値がない。みもよもなくふるへている、家のない雀と同じ境遇だ。こんな自分がとても不憫だ。「書いて（本を聞かせて）」「愛をもらうこと」、これが一番ほしいのだ。自殺や心中、薬への依存も、そういう怒りの気持ちの表れなのだ。助けて欲しい、嫌わないでほしい、拒絶しないでほしい。私には愛情、希望、名誉が必要だ。私が生きるための根拠が欲しいのだ。

4. 結果と考察

太宰は、『思い出』という作品の中で、叔母の乳房が家の出口を塞ぎ、「もうお前の面倒を見るのが嫌になった」という声が聞こえてくると言う「夢」を描いている。この夢が、実際に太宰が見た夢なのか、創作によるものなのか、明らかになっていないが、少なくとも太宰にとって叔母が、母性的な存在として大きな役割を果たしていたことを示唆している。上記の「実存的意味からのテキスト」から読み取れることは、太宰は、叔母の乳のでない乳房を咥えながら、叔母が語ってくれる昔話を聞いており、叔母は、でない乳の代わりに「語り」を太宰に与えていたという事実である。

太宰にとって、「語り」を聴くことは、母親の母乳を吸うことに近い、根源的な母性経験に通じるものであったと言える。叔母きえは、現実には太宰の実母ではなかったが、太宰の実存的な次元で、実母よりもずっと重要な母親的存在であった。また重要なのは、タケが太宰に「読むこと」を教えたことである。叔母が「語り」を聴かせるという形で「授乳」をしたとすれば、タケは、「読む」という言葉に対する能動的なかわり方を教えた。太宰にとって、「言葉」は、根源的な母性体験と重なり合っている。しかし、この二人の「母親」は、どちらも太宰の母の役割を、それぞれの事情から果たせなくなる。青年期までの太宰は、実母、乳母、叔母、タケという四人の女性が入れ替わり立ち代わり現れ、消えていくという錯綜した母性体験をしている。母子関係の安定、一貫性といったものを体験できずに終わっている。逆に見れば、太宰には「愛され、育まれる存在」としての安定した経験が欠けている。太宰治にとって、「書く」という行為の根底には、「言葉」と強く結び付いた母性体験への強い憧憬と願望が潜んでいる。であればこそ、彼は書くことを生涯の仕事として選び、「作家」となったのである。太宰が、芥川賞の受賞に異常なほどのこだわりを見せたことも、「書く」ということの意味が、太宰にとって、根源的な母性の体験とつながっていたからである。したがって「受賞できない」ことは、「昔話一つ＝母乳」をもらえないことを意味する。「母乳」をもらえないことは乳幼児にとっては死を意味している。受賞できないことが、母乳を与えられない「餓死」と同じような絶望感と苦痛を伴う体験であったからこそ、太宰は、病的なほどの強いこだわりを見せたの

である。菊池寛や川端康成宛ての書簡にみられる、見苦しいほどの懇願、哀願、そして「～してくれなければ死にます」といった言葉から臨床家が読み取るべき、太宰の根源的な欲求は、「私は一生懸命に書きます。ですから芥川賞＝愛情をください。どうか生きさせてください」というメッセージなのである。

VI 終わりに

本研究は、BPD患者としての太宰治を、IPAという現象学的な視点から見直すことによって、その病理やBPD的人格構造の分析を行うのではなく、それらの意味を一人の人間の生の営みとして、あくまで「太宰個人の一回的で独自の生の文脈の」中で理解しようとした試みである。「一事例研究」という、非自然科学的な方法論は、当然、自然科学とは異なる目的と意義を持っている。それは、「BPD患者は一般的に～である」ということを明らかにするのではなく、「太宰と言う個人は、自らが、その中へと投げ出されたBPDという実存様態の中で独自の生き方をしたということを明らかにすることである。

このような研究の意義は、心理臨床家が、患者を、精神病理学や心理学的概念一般を通して観ることによって、その患者の独自で一回的な生の意味を見失う危険性を示唆し、「自然的態度」ではない「現象学的態度」によって「患者」ではなく、生きた個人としての「あなた」を見るための視点の重要性を示すことにあった。一人称記述により、テキストを研究者自身への「語りかけ」の形式へと変換することで、そのような見方が可能になることを明らかにできたと考えている。

参考・引用文献

- 浅田高明『太宰治の「カルテ」』文理閣1981
 安藤 宏、神谷忠孝編『太宰治 全作品研究事典』勉誠社1995
 市川溪二『太宰を支えた女たち』北の街社 2001
 猪瀬直樹『ピカレスク』文春文庫 2007
 カーンバーク、O『対象関係論とその臨床』岩崎学術出版社 1983
 ジョルジ、A. 著『現象学的心理学の系譜—人間科学としての心理学』早坂泰次郎 訳
 太田静子『斜陽日記』小学館文庫 1998
 奥野健『恍惚と・男編不安』養神書房 1966
 ジョルジ、A. 著『心理学における現象学的アプローチ—理論・歴史・方法・実践』新曜社2013
 ハイデガー、M 著『存在と時間』原 佑 訳 中央公論社1980年
 懸田克躬「破滅型作家の精神病理—太宰治の人と作品を中心に」1983 『群像』講談社1958所収
 河合 博「太宰治の病誌」1963『神経質』第4巻1962所収
 北垣隆一『太宰治の精神分析』北沢図書出版1974
 木田 元、野家啓一他編『現象学事典』弘文堂1994
 『太宰治全集 12』筑摩書房1957
 津島美和子『回想の太宰治』講談社、2008

『太宰治全集12書簡』 筑摩書房 1999

中野嘉一 『太宰治?主治医の記録』 宝文館出版 1988

長篠康一郎 『人間太宰治の研究』 I、II、III、虎見書房 1966, 1967, 1970

長篠康一郎 『太宰治 七里ヶ浜心中』 広論社 1980

野原一夫 『太宰治 生涯と文学』 ちくま文庫 1980

野原一夫 『回想 太宰治』 新潮社 1980

西村ユミ著 『語りかける身体?看護ケアの現象学』 ゆみる出版 2001

林直樹 『よくわかる境界性パーソナリティ障害』 林直樹 主婦の友社2011

林直樹 『境界例の精神病理と精神療法』 金剛出版 1990.

ベナー,P著 『解釈的現象学』 相良?ローゼンマイヤーみはる監訳 医歯薬出版株式 1994

ベルフェッティー他 「身体と痛みのはざまで」 小池美納訳 2006 (『現代思想10 特集?臨床現象学』 青土社 2010)

マスターソン,J 『自己愛と境界例』 星和書店 1990

町沢静男 『ボーダーラインの心の病理?自己不確実に悩む人々』 創元社1995

松浪信三郎他 編 『実存主義辞典』 東京堂出版 1966年

山岸外史 『人間太宰治』 筑摩書房 1962、

山内祥史 『太宰治の年譜』 大修館書店 2012

米倉育男 「太宰治?愛と憎しみと死と」 1982 (『太宰治?芸術と病理』 中野嘉一編 宝文館出版1982所収)

『太宰治 はがき抄 山岸外史にあてて』 近畿大学日本文化研究所編 翰林?書房 2006

渡辺二郎 『ニヒリズム』 東京大学出版 2002